

【講演記録/短大 60 周年記念講演】

丸山薫と愛知大学短期大学部学生歌「梢の歌」をめぐって

愛知大学短期大学部教授 安 智史

(2019年12月15日、愛知大学豊橋校舎7号館)

本日(2019年12月15日)、愛知大学短大部創立60年を記念して、丸山薫先生(1899~1974)の作詞した短大部学生歌一校歌ですねー「梢の歌」詩碑が、愛知大学構内、短大部ゆかりの、旧短大本館跡地に建てられましたこと、まことにめでたく存じます。

今まで、丸山薫先生の詩碑は、私の把握している限りでは3つありました。今回の「梢の歌」の詩碑は、その4つ目になります。

詩碑の最初のもは、丸山先生が戦争中疎開していた山形県西川町岩根沢にあります。これが同じ山形県の川西町ですと、本間喜一先生の出身地で、愛知大学のゆかりの土地になりますね。どちらも山形県ですし、西川町、岩根沢とも、何か提携できると良いのではないかと思います。

戦争中、丸山先生はそちらに疎開し、岩根沢国民学校(小学校)の先生をしていました。その教え子たちが中心になって、丸山先生の晩年の1972年に、小学校校庭に建てられたものが最初です。いまはもう廃校になってしまいましたが、いまでも敷地は詩碑保存会の皆さまが管理して、とてもきれいな状態が保たれています。

2番目の詩碑は、丸山先生の没後、豊橋市内の高師緑地公園に建てられました。それから3つ目は、1994年に静岡県の御前崎灯台に建てられました。



ですから今回の「梢の歌」詩碑は、丸山薫詩碑としては4つ目、豊橋市内では2つ目です。けれども、豊橋市にとって特別な意味があると思います。

というのは、すでに市内には高師緑地公園の詩碑があるわけですが、そこに刻まれている詩「美しい想念」は、じつは岩根沢時代のもので、詩集『北国』(臼井書房1946年)に収録されているものなのですね。

それに対して、直接に豊橋市の、愛知大学にゆかりの丸山薫の詩文が、その土地で詩碑になるというのは、今回の「梢の歌」の詩碑が初めてになります。そういう意味でも、丸山先生にとっても、豊橋市にとっても、特別な意義があるのではないかと思います。

本学名誉教授の黒柳孝夫先生から、貴重なCDをお借りしたので、この「美しい想念」の丸山先生の自作朗読を、この機会に聞いてみたいと思います。

夜空に星が^(きら)煌めくやうに
真昼の空にも星があると
さうおもふ想念ほど
奇異に美しいものはない

私は山に住んで ^{たびたび}なぜか度々
そのかんがへに囚はれる
そして 山ふかく行つて
沼の面を^(じつ)凝と^み瞞つめる

すると じつさいに
森閑と太陽のしづんだ水底から
無数の星がきらきら^(かがや)耀き出すのが
瞳に見えてくるのだ

これが、「美しい想念」の自作朗読です。この第1連冒頭4行が、豊橋市の高師緑地公園に建てられている詩碑に刻まれています。1984年に建てられました。

豊橋市は、丸山先生の業績を記念して、1994年から丸山薫賞を主催していて、今回で26回目になります。今年(2019年)は、ちょうど丸山先生の命日である10月21日に、市長さんや、本日お越しにいただいている副市長も出席されて、その授与式がありました。今年を受賞者は清水哲男さんというベテランの詩人の方です(詩集『換気扇の下の小さな椅子で』)。

さて、丸山先生ご本人にお話を戻します。こちらは、戦後だいぶ経って、愛大の先生をしていた時期に、ご夫婦で写っている写真です。(写真1)

場所は多米峠に近い蟬川、今の東小鷹野です。そちらに丸山先生のご自宅があって、その縁側でご夫婦で写したものです。奥さんの三四子さんも、愛知県内の知立のご出

(写真1)



身です。知立市の染め物問屋のお嬢さんでした。薫先生が豊橋にいらっしゃる時に知り合って、1928年に結婚しました。結婚した時はまだ大学在学中で、住んでいたのは東京でしたが、結婚式は豊橋で挙げました。

丸山先生は本籍地も豊橋市で、今でも地名がそのまま残っておりますが、市内東田坂上近くの、^{かわらまち}瓦町が本籍地です。ところが、各種文学事典、あるいは広辞苑のような辞書を見ますと、九州の大分生まれとあるだけで、豊橋市のことが出てこない場合があります。それは薫先生のお父さんが、今で言う転勤族で、たまたまお父さんの赴任先の大分で生まれたということなのです。

薫先生は豊橋に落ち着く前に、内務省の高級官僚だったお父さんの転勤にしたがって、小学校を4回転校しています。そうして、明治44年(1911年)に、お父さんがご病気で退官されて亡くなる。そこで豊橋市瓦町に住んでいた、母方の祖父の土地内に移り、豊橋市立八町小学校に転入しました。八町小学校も今でもありますね。今の豊橋公園、当時は歩兵第十八連隊本部ですが、その近くです。ここで5つ目の小学校を卒業します。

先生のご母堂・竹子さんは、渥美半島、田原の出身です。そのお父さん、丸山先生にと

ってのおじい様は、市川^{のぶまさ}信順という方です。旧田原藩士で、西南戦争に従軍しました。漢学の素養と豊富な話題の持ち主だったので、少年時代の丸山先生は好んでその話を聞き、影響を受けたと回想しています。

そのおじい様のことを含む、少年時代の思い出について、「伊良湖岬」（田宮虎彦編『岬』有紀書房 1960年所収）という、丸山先生のエッセイから引用させていただきます。丸山先生は、豊橋が自分の本籍地だということは、あまりおっしゃいませんでした。むしろ、「エトランゼエの思い」というのを強調する。ちょっと読んでみます。

幼少時から、あまりにも諸方を移り歩かされた私の心の中には、故郷の観念というものがない。いや、育つべき故郷の種など最初から無かったのである。だが故郷への思いの育たなかった私の胸中には、その代りいつしかエトランゼエの思いがはぐくまれていた。

「エトランゼエの思い」はほかにも、戦後の薫先生のいくつかのエッセイで強調されています。けれど、それは果たしてそうだったのだろうか、私は、読んでいくと感じてしまうのです。というのは、ちょっと中略しながら続きを読ませていただきます。

私はこの岬の名称だけは小学校の低学年生の時から知っていた。私はそれを母から教わった。〔中略〕母の口から聞かされる『いらご』という雅びた言葉が度重なるにつれて、いらご、いらご、なんと舌の上にころがるような愛らしい地名だろう、と私は思うようになった。そしてそのひびきを、きしゃごや海辺の小石のイメエジと結びつけて、滑ら

かに光沢を放つ珠のように、心の奥で愛するようになった。その『いらご』が渥美半島突端の岬の名であり、母の生まれた田原の城下町が、同じ半島の中ほどに在ることを知ったのは、後年、私が豊橋市の小学校へ転校して来てからのことである。

そして、丸山先生は八町小学校を卒業し、今の時習館高校、当時の愛知県立第四中学校に入学します。

中学時代の私は、祖父〔これが、母方の祖父、市川信順さんです〕の監督のもとに在った。祖父はその頃もう八十歳にちかい高齢だったが、あの有名な渡辺崋山を出した田原藩のサムライ上りだった。秋になるとその祖父がしばしば独り言のように呟いた。

「海が鳴るのう海が鳴るのう」

そしてまた言うのだった。

「よく聴いてごろうじ。遠州灘が鳴つとるぞよ」

私は幾度か耳を澄ましてみた。しかし、私に海の鳴る音はききわけられなかった。けれどもまた、祖父のその言葉を立証するように、必ずその晩か翌日には台風がやってくるのであった。

いかがでしょう。これを読みますと、生まれた場所ではないにせよ、現代の私たちと比べてみれば、薫少年が、本当に豊かにこの豊橋、東三河の風土のなかで、多感な、豊かな時間を過ごしたというのがうかがわれるのではないのでしょうか。羨ましいほどです。現代の私たちから見ると、やはり丸山先生にとって、この三河の地は故郷と言える場所だったのではないかと、こういった文章を読むと思ってしまうわけです。

あるいはむしろ、現代の私たちはみな、薫先生のように、多かれ少なかれエトランゼエ(異邦人)の部分を抱えて生まれて、生きていのではないかと、とも考えられるのではないのでしょうか。それが、生まれた場所かそうでないかにかかわらず、私たちは自分のふるさとを、自らつくり出す必要があるのかもしれない。そう考えると、やはり薫先生にとって、豊橋の地はふるさとといえる場所だったのではないかと思うのです。今回の詩碑建立も、こころのふるさととしての豊橋や愛知大学への愛を、より広く、豊かに呼び起こす大切なよすがとなりうるのではないかと、思えるのです。

話がちょっとそれました。さて、1912(明治45/7月30日より大正元)年に旧制第四中学(現・時習館高校)に入学し、薫少年は海へのロマンティックなあこがれから、海員志望を決意します。エトランゼエの思いと、海の向こうの世界へのあこがれというのは結びつきますね。そうして、浪人しながら、東京高等商船学校、今の東京海洋大学に入学します。

もともと日本は四方を海に囲まれています。戦前の日本は政治的にも経済的にもまさに海洋国家でした。その高級船員や船長さんを養成する学校ですから、当時の日本でトップレベルの学校です。

商船学校時代の丸山先生の写真があります。(写真2)後列左端、大柄で丸顔ですね。この大きくて丸い山のようなこの人が丸山薫先生です。本当に自分の希望がかなって喜びました。

ところが、体質的に合わなかったのです。高等商船学校は海洋軍事大国でもあった、当時の日本海軍の予備士官学校を兼ね

(写真2)



ていました。全寮制の、本当に軍隊式の、かなり訓練の厳格な学校だったのです。それで、薫先生は体調を崩して、とうとう退学を余儀なくされてしまいます。

結局その数年後に、もう一度受験し直して、京都の旧制第三高等学校に入学します。今の京都大学ですね。ところが、そこでも1年留年してしまいます。卒業はできたのですが、落第したのです。その後、東京帝国大学の文学部国文学科に入学します。これも日本の最高学府ですね。ところが、そちらも結局中退してしまうのです。

ですから、薫先生は、高等商船学校に入学し、京都大学に入学し、東京大学に入学する。日本でもトップレベルの学力があることはまちがいないですね。ところが、一つは退学させられ、もう一つは落第し、最後に東大は中退してしまうわけです。

つまり、丸山先生は本当に実力がある方だった。ただ、生き方にある種の不器用さ、あるいは挫折感を抱えていらっしやったところがありました。本当に実力は持ってい

らっしゃるけれど、非常に不器用で挫折を抱えている。その挫折感や不器用さが薫文学の特徴であり、挫折した者や、あるいは弱者の立場に置かれた者への優しさということに結び付いているということが言えるかもしれません。

ただ、東大在学中の1928年に、高井三四子さんと結婚したということは、非常に丸山先生にとって幸運でした。お子さんはいらっしゃらなかったのですが、明治生まれの男性にしては本当に珍しいのですが、子どもがいないということは気にせずに、仲良く生涯を送りました。

戦前、東京で暮らしている間、丸山先生は詩誌『四季』を、堀辰雄、三好達治と一緒に主宰し、昭和10年代の主知的抒情詩人の中心となります。これは日本文学史上、最も大切な出来事の一つとされているのですが、けれど詩人ですから収入はほとんどありませんね。その間、奥さんは銀座の一流のマネキン倶楽部、今のモデル事務所ですね、そのモデルとマネージャーをしていて、2人の生活は奥さんの収入で賄われていました。薫先生が亡くなった後、三四子さんは『マネキン・ガール 詩人の妻の昭和史』（時事通信社1984年）という、とても面白い回想録も出されています。

新婚当時、薫夫妻にお母さん、それに妹夫妻と一緒に、当時暮らしていた杉並で撮られた写真があります。**(写真3)**真ん中が丸山夫妻と、お母さんの竹子さん。それから、左端は妹のコマさんで、右端がその旦那さんです。少々余談になりますが、この妹の旦那さん、松田千秋さんは、海軍の高級将校で、後に戦艦大和の2代目艦長になりました。今から5年ほど前『毎日新聞』（2014年

(写真3)



8月13日)に、「戦艦大和：艦長の在米英文日記「豊かさ、比較にならない」という見出しの記事が掲載されましたが、それが松田さんです。1929年から2年間、アメリカ大使館付武官補佐官として暮らしていた時の日記が発見されたのですね。戦後は発明家として有名になった、技術畑の方です。残念ながら義理のお兄さんが丸山薫だということは紹介されていませんでした。

ちょっと余談になりました。さて、丸山先生の文学に現れる、挫折を抱えた人たちへの優しさ、あるいは弱い者への同情、いたわり。そういった点で、実は、この「梢の歌」の歌詞は、たんなる歌詞を超えた、丸山薫の純文学詩らしい特徴を備えています。

「梢の歌」は、愛知大学短大部「学生歌」と名付けられていますが、校歌です。愛知大学は伝統的に「校歌」という言い方をしないのですね。短大と四大を一緒にした愛知大学全体の校歌も「愛知大学学生歌」と言っています。ですから「愛知大学短期大学部学生歌「梢の歌」も短大部校歌です。

ただこれは、校歌としては大変、変わった歌詞です。丸山先生は私が確認しただけでも、小学校から高校までの校歌を55校作っています。まだ見落としているところがあると思います。たとえば、豊川高校は、数年

前甲子園に出場して勝ちすすみましたね。するとTVで校歌が流れ、作詞作曲者の名前も出ますね。そこで作詞丸山薫と出て来て、慌ててリストに加えたということもありました。今は学校のホームページに作詞・作曲者名が載っていることが増えましたから、調べられるようになりましてけれども。まだ載せていない学校もありますね。もしも、こちらにも丸山先生ですという校歌が分かりましたら、ぜひご教示いただきたいと思えます。

ただ、それら小学校から高校までの校歌類に比べても、この「梢の歌」の歌詞というのは、とても変わった詩です。後で卒業生の皆さんが合唱なさるので、ここでは歌いませんが、1番の歌詞を朗読させていただきます。

あらしが森にさわぐ夜は
たかい梢の栖にねむる
小鳥のゆめも覚めがちに
ああ たえまなく揺れてるように
わがゆく徑にともす灯は
不安のなかに伏し靡き
ああ 靡き伏し ほのゆらぐ
というふうになっています。

校歌にしては、だいぶ変わっているとい

丸山薫作詞団体歌・校歌一覧

団体歌

豊橋まつり音頭
豊橋中央青果市場の歌
鬼祭音頭

校歌

寒河江南部小学校	[鈴木清太郎]
田代小学校	[团伊玖磨]
大浜小学校	[永見貞三]
岩西小学校	[山田昌弘]
福岡小学校	[富田勲]
六ツ美南部小学校	[永見貞三]
蒲郡南部小学校	
福江小学校	
知立小学校	[永見貞三]
亀城小学校	[中田喜直]
和倉小学校	[供田武嘉津]
曳馬中学校	[市川都志春]
西川町西部中学校	[信時潔]
牟呂中学校	[加藤直四郎]
湖西中学校	[中島静]
一宮中学校	[山田昌弘]
豊岡中学校	[加藤直四郎]
西浦中学校	[永見貞三]
稲武中学校	[鈴木清]
二川中学校	[信時潔]
松平中学校	
新川中学校	[岡本敏明]
南部中学校	[永見貞三]
刈谷東中学校	[森一也]
鷺津中学校	[山田昌弘]
吉田中学校	[杉浦正嘉]
六ツ美中学校	[永見貞三]
東部中学校	[千田鉦二]
幡豆中学校	
安城南中学校	[永見貞三]

*新編丸山薫全集第六巻をもとに補正して作成
*作曲者名が判明しているものは[]内に記す

豊橋工業高等学校	[山田昌弘]
谷地高等学校	[信時潔]
瑞陵高等学校	[下総皖一]
福江高等学校	[下総皖一]
新居高等学校	[高橋半]
豊橋商業高等学校	[山田昌弘]
松陰高等学校	[山田昌弘]
安城高等学校	[大村能章]
鳳来寺高等学校	
足助高等学校	[清水脩]
碧南高等学校	[石桁真礼生]
田口高等学校	[森一也]
豊田東高等学校	[清水脩]
加納高等学校	[石桁真礼生]
稲葉高等学校	[松本民之]
中央高等学校	
多治見女子高等学校	[石桁真礼生]
岐阜女子商業高等学校	
榑原高等学校	[平井康三郎]
古河第三高等学校	[高木東六]
蒲郡高等学校	[山田昌弘]
本郷高等学校	
国府高等学校	[山田昌弘]
千種高等学校	[平井康三郎]
豊川高等学校	[駒井一陽]
梢の歌	
(愛知大学短期大学部学生歌)	
	[山田昌弘]

うことは一目でお分かりになると思います。何といっても、学校名を歌い込んでおりません。したがって当然、学校を褒めたたえるような言葉も入っておりません。

また、関連して、校歌というのは通常、学校としての立場から、歌い手である学生生徒に対して、命令や促しをする文言が入ります。何々「しよう」とか「せよ」とか、文語調ですと「べし」とか、あるいは学生自身の意志ということにされて「する」「せん(む)」といった言葉が入るんですね。しかし「梢の歌」にはそれすらありません。

では、いったいこれはどういう、だれのため、何のための歌詞なのでしょう。

そう考えれば明らかなように、これは、歌っている学生の皆さん自身のための歌詞ですね。歌っている短大部学生を小鳥に例えて、その不安の心に寄り添い、そしてそれを慰め、はげますための歌詞ですね。丸山薫文学に現れる、弱者への同情という特徴が、わかりやすく、歌っている学生の皆さんの心に寄り添い、染み込む言葉でできているんですね。

ただ、校歌というのは1番だけ歌う場合がありますけれども、「梢の歌」はやはり1番だけで終わってはいけない詩ですね。それだと「わがゆくみち徑」が暗いまま終わってしまう。今回の詩碑もきちんと2番まで入っておりますけれども、2番まで歌うと、見事に心が開放されますね。2番の歌詞はこうです。

ひかりが森に射す朝は
 さむい枝間のす栖にそだつ
 小鳥の雛も はばたいて
 ああ 一羽づつ飛びたつように
 わがあす未来の日のしあわせは
 希望のぞみのかなた立つ虹を
 ああ 虹くぐり あまか天翔る

というふうになっています。嵐が収まって素晴らしい朝になった、不安な夜は終わった。私たちも「わがあす未来の日のしあわせ」に向かって、希望の虹に向かって羽ばたきことができるだろう。私たちはもっと未来に希望を持っていいんだよ、というふうに語り掛けてくれます。

この詩が作られたのは1964年です。ずっ

と制作年度がわからなかったのですが、最近、卒業生の方々のご協力もあって、作られた年代が判明しました。昭和39年、最初の東京オリンピックがあった年ですね。当時は高度経済成長期の真ん中ですが、時代の変化に関わりなく、歌っている短大部女子学生たちは18歳から20歳。やはり未来は本当に不透明で、ちょうど不安を持つ、未来への不安に悩む時期です。

そういう時期に、その不安の心に寄り添い、慰め、そんな不安ばかりは続かない、輝く未来に向けての朝が来るのだよというふうに、いたわり励ましてくれる詩なのです。これは校歌としては本当に異色ですが、とても素敵で、丸山薫先生の文学詩の傑作の一つと言って良いのではないかと、私は思っています。

これも少々余談じみた紹介になりますが、この作詞をした当時、丸山先生は体調が悪かったというようなことがあって、自分の作ったこの詩が、あまり校歌らしくないということに気にして、当時の短大部事務長・岩井透さんに謝るような内容を含む手紙を送っています。じつは、この手紙の現物が今どちらにあるのか確認がとれておりません。ご存じの方がいらっしゃったらご教示いただければ幸いです。以前、そのコピーを頂いたことがありますのでそれを参照しました。日付は「2月5日 夕」です。年度は記されていませんが、さきほど申し上げたように1964年です。

こういうふうに丸山先生はおっしゃっています。

電話で申しましたように歌詞原稿をお送りします。到底、学生歌というようなものではなさそうですが、もし内容

にふさわしい曲がつくなら、一応、女子学生のコーラスには堪えうると思ひ、卒業祝いの宴にうたわれてもしかるべきかとも考へて、山田氏〔作曲者の山田昌弘先生〕へ送稿して作曲のこともたのんでおきました。あなたにもお送りして高覧を乞うわけです。

いまは御依頼にそのような歌らしいものが生れぬ状態にいることが、先日来いろいろやってみて、はっきりと解りました。その意味で同封の作は偽らぬところです。

学生歌らしい健康で力づよい歌詞は、気分的好転を待つて、改めて想を練りたく思います。

それまで日数をお貸し下さい。

草々。

これを見ますと、いわゆる健康で力強い歌詞ではないということ、丸山先生が気にいらっしゃるといことが分かります。しかし、やはり、健康であることや力強いことを強調することだけが歌の使命かという、そうではないと私は思います。

むしろ、こういった、学生の抱く不安や悩みに寄り添い、そして開放してくれる。こういう校歌が、もっとあって良いのではないのでしょうか。これこそ丸山先生の文学の本質に通じる、素晴らしい校歌であり、詩であると思います。本当に、丸山薫先生は、弱者への同情というものが基本にある文学者だと、改めて思います。

さて最後に、その弱者への同情が、とても大きなスケールになる場合がありますので、紹介させてください。薫先生は、戦前の段階で、当時日本が併合していた朝鮮半島の人々への同情を歌った散文詩「朝鮮」も発表

しています。(初出『改造』1937年7月号、『物象詩集』河出書房1941年2月刊所収)。実は、丸山先生のお父さんの丸山重俊さんは、1906~8年、併合直前の韓国統監府の警視總監で、伊藤博文の右腕だった方でした。

これも余談になりますが、この時期の伊藤博文を描いた松本清張の短編に「統監」(『別冊文藝春秋』1966年3月号)という作品があります。これを読んで見ると、伊藤博文をソウルに出迎えた、その「出迎えのなかには警察顧問の警視丸山(重俊)さんがおられました」とありまして、「(重俊)」という実名注記の部分も清張さんの原文のままです。この丸山重俊さんが、丸山先生のお父さんですね。忠実に伊藤博文のために働いておりまして、「報告は警察顧問の丸山さんからでしたが、王宮の前にすわりこんでいる朝鮮人は日本の警察隊の手でみんなひきずりだした、不穏な演説をするものは全部ひっくくったということでした」と、松本清張さんが小説化しているなかに、お父さんも登場しています。丸山先生は、この時期に現地で過ごしていたわけですから。

先生が晩年に発表した「丸山薫自筆年譜」(『丸山薫詩集』角川書店1972年11月刊所収)を見ますと、明治38年(1905年)、薫先生は満6歳ですが、以下のように記されています。

父転任。韓国京城(ソウル)に移り、居留国立旭小学校に入学。時まさにかの国併合の準備時代で、随所に目撃した邦人の横暴ぶりは子供ごころに深く刻みこまれ、後年の散文詩「朝鮮」になった。

この自筆年譜で、個別の作品名まで挙げているのは「朝鮮」だけです。先生にと

っても印象に残っていた自作詩であると思われまます。もっとも、自筆年譜の記述でもぼかしてあるように、先生は生前、自分のお父さんが、併合に直接かかわるほどの立場にあったことは、戦前から一貫して、友人にも言明したことはなかったとのことですが。

散文詩「朝鮮」は、「いつの頃からか、姫は走つてゐた。姫のうしろを魔物がけんめに追つてゐた」とはじまります。姫に、朝鮮の人々を寓意し、一方、襲いかかる魔物に「邦人の横暴ぶり」が、その指導者の一人が自分のお父さんであることも暗に寓意されているわけですね。もちろん、日本にたいして弱い立場に立たされた朝鮮韓国の人たちへの同情がテーマになっていることはすぐに読み取れます。これを1937年（初出）そして1941年（詩集収録）という、日本が現に朝鮮を支配していた時代に発表するというのは、勇気が要ることだったのではないかと思います。そういう勇気を丸山先生は持っていた。

一方で、その数年後には、今度は日本が敗戦しました。丸山先生ご夫妻も岩根沢に疎開したのですが、その直後の1945年5月の大空襲で、東京の自宅は全焼してしまいました。本当に、日本全体がぼろぼろの状態になり、敗戦を迎えます。

敗戦後まだ間もない1946年、雪深い山国である山形県岩根沢の自然と人々のなかで、小学校の先生をする暮らしのなか、薫先生は、今度は「詩人の友」という詩を発表します（『詩標』第1号1946年5月発表、詩集『花の芯』創元社1948年6月刊所収）。最後にこれを朗読させていただきます。

敗れた者でなければ
友ではない
虐げられた者でなければ
味方ではない

押しのけ進む者は
旗とともに去れ

^(たたず)
ゝんで 憩うことなき脚
さまよう飢ゑ
永へに返すを知らぬ辱め

それら夜更けの想いに
雨風の中に
闇のななたに
おも^ぶせて誰と名乗らぬ^か陰翳

おぼろなる求めと
声たてぬ啜り泣きこそ
われら詩人の味方なのだ

という詩です。あくまで自分は敗れた者、虐げられた者の味方でいようと。詩人というのは、何よりもそういう人でなければいけないという決意を宣言する詩ですね。これを、日本がボロボロに敗戦した翌年に発表しました。

丸山薫先生は、お父様が伊藤博文の右腕だったり、義理の弟さんが戦艦大和の艦長だったり、戦前の国家の中枢にかかわる方々が身内にいたわけですが、ご本人は戦前戦後を一貫して、弱者の立場に立ってものを考え詩作していました。「梢の歌」も、学生の不安に寄り添う、そして心を開放してあげようとする。今は不安でも夜明けが来るんだよ、希望があるんだよと歌った。こ

ういう素晴らしい詩を校歌として持つことができた愛知大学短大部というのは、幸運な学校ですし、丸山先生がこちらの先生でいらっしやったことは、本当に幸福だったと思います。

今日はその詩碑の除幕式を迎えますこと、本当におめでとうございます。私のお話は以上とさせていただきます。

*引用文中のカッコのうち、()は原文のまま。[]の場合は、講演者による補注です。

*講演中で触れられなかった薫先生の略歴（講演会場での配布資料には記載）を、以下補足します。

・丸山薫 略歴

詩人。1899年生まれ。1932年第一詩集『帆・ランプ・鷗』刊。昭和を代表する主知主義抒情詩人。1948年、疎開先の山形県より本籍地の豊橋に移住し、翌49年愛知大学講師に就任。1959年より客員教授を務め、文学部と新設の女子短大部で教えた。1974年豊橋市蟬川（現・東小鷹野）の自宅で永眠。